

川崎市多文化共生社会推進協議会
令和7年度第2回地域日本語教育の推進に関する部会 議事録

| | |
|--------------|---|
| 会議名 | 川崎市多文化共生社会推進協議会 令和7年度第2回地域日本語教育の推進に関する部会 |
| 日時 | 令和7(2025)年10月30日(木) 午後2時10分～午後3時40分 |
| 場所 | 川崎市役所 本庁舎 21階 市民文化局会議室 |
| 出席した者の氏名 | 部会委員 加藤 正毅 委員 (学校法人深堀学園 外語ビジネス専門学校 副校長) 河野 眞吾 委員 (技能実習監理団体 日本さくら協同組合 事業部長) 南 昭子 委員 (公益財団法人川崎市国際交流協会 常務理事・事務局長) 吉田 聖子 委員 (公益財団法人川崎市国際交流協会 評議員、人材育成コーディネーター) |
| | オブザーバー 公益財団法人川崎市国際交流協会交流事業課 課長 安藤 雅子 経済労働局労働雇用部 担当課長 加藤 行一郎 (代理 志賀担当係長) 教育委員会事務局教育政策室 担当係長 川上 克哉 教育委員会事務局生涯学習部生涯学習推進課 担当係長 仲田 浩 |
| | 事務局 市民文化局市民生活部多文化共生推進課 課長 小出 博美 " 担当課長 吉留 瑞穂 " 課長補佐 松長根 直樹 " 担当係長 藤澤 千寿香 " 総括コーディネーター 廣田 智香子 " 地域日本語コーディネーター 五十嵐 麻実 " 地域日本語コーディネーター 本多 倫子 |
| 欠席者の氏名 | 神吉 宇一 委員 (武蔵野大学グローバル学部日本語コミュニケーション学科 教授) 塩川 克久 委員 (公益財団法人川崎市産業振興財団 産業支援部長) 丹野 清人 委員 (東京都立大学人文社会学部人間社会学科 教授) 原 千代子 委員 (社会福祉法人青丘社 理事・事務局長) |
| 議事及び公開・非公開の別 | 議事 (公開) 1 開 会 2 議 事 (1) 今年度事業の進捗について (2) 令和8年度地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業について (3) 今後の審議計画・スケジュールについて 3 その他 |
| 傍聴者 | 0名 |
| 配布資料 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 座席表 ・ 部会委員名簿 (資料1-1) ゼロビギナー向け短期集中講座 (資料1-2) キャリアサポートのにはongo (資料1-3) 令和7年度川崎市地域日本語教育スキルアップ講座 (資料1-4) 川崎市地域日本語教育フォーラム (資料2) 令和8年度地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業について (資料3) 今後のスケジュールについて (参考資料1) 外国につながる高校生・若者キャリア支援相談会 多文化コミュニティひろば12月特別企画 (参考資料2) 識字学級調査票 (参考資料3) 第6回外国人材活躍応援セミナー |

■南委員（部会長）

それでは、議事に沿って進めてまいります。

議事の（１）今年度事業の進捗について、事務局から説明をお願いいたします。

■五十嵐地域日本語教育コーディネーター

（資料１－１）ゼロビギナー向け短期集中講座について説明

■廣田総括コーディネーター

（資料１－２）キャリアサポートのにはほんご、（資料１－３）令和７年度川崎市地域日本語教育スキルアップ講座、（資料１－４）川崎市地域日本語教育フォーラムについて説明

■南委員（部会長）

ここまでの説明について何か御意見、御質問をいただけたらと思います。

最初に、ゼロビギナー向け短期集中講座に関していかがですか。

■吉田委員

ゼロビギナー向けの短期集中講座は、こちらからの呼びかけに対して非常に熱心な講師の方たち、それから応募者が大勢ありましたよね。

■五十嵐地域日本語教育コーディネーター

講師の希望される方が多く、沢山の応募がありました。

■吉田委員

その中から選ばれたということで、皆さん、現役で市民館ですとか、国際交流センターで活動経験の豊富な方たちで、本当に優秀な方々が集まったと思います。１人でクラス授業を持てる方が大勢いらっしやっただので、本当でしたら５０人くらいの学習者を賄うだけの人が教える側には集まっていた。

ただ、ゼロビギナー向けとあったのですが、募集してもゼロビギナーが誰もいなかったということがあり、そのところはなかなか難しいかなと思いました。

その間、市民館の日本語教室とか、国際交流センターではゼロビギナーからの問合せがあって、その後９月からスタートされて、他地域の事例から見ても、ゼロビギナーの方が、その後、地域に密着して続けていくことが大切なので、高津市民館でそのまま活動できる学習者がいると高津でゼロビギナーをやることに意義があるのですが、川崎区の方にとっては遠かったということもあるかもしれないな。

短期集中に意味があるかどうかという検証もする事業だったのですが、残念ながらゼロビギナーの方が誰も来なかったということで、それを検証することはできませんでした。

ただ、その代わり、さっき控えめにおっしゃっていましたが、学習者の学習意欲がすごく強くて、ある程度日本語を勉強した、自分でノウハウを持っている方たちが、大学で学んでいたりと、高校とかで学んでいたりと、それから独学でされた方とか、意欲的に日本語を学んでこられた方、日本で２回目となる方もいらっしやいました。

そういう方たちにとっては、学べる場所が足りない中で、しかも日本語教師と１対１、無料で習えるチャンスがあれば、これは彼らにとっては宝物のような時間だったので、非常に満足度は高かったですね。

ただ、講師の方からしてみると、ゼロビギナーに向けて、C a n d o型のプログラムを実際に体験できるだろうと思ったら、ゼロビギナーが誰もいないということでしたので、講師の方の満足度を上げるために、五十嵐コーディネーターと四苦八苦しながら組み替えて、新しい組合せで、どれだけ発話のパーセンテージを上げるかなど、そういったことに注力させていただきました。

このプログラム自体は、当初の目的は、結局達成はできなくて、０%ですけれども、市内に大変学習意欲の高い日本語がある程度できる方たち、時間もあって、車でも来るような、生活にもゆとりのある方たちが一定数いらっしやることははっきりと分かりました。その方たちは方向さえええれば、その後も継続して勉強

されるということで、国際交流センターにもいらっしやっていますし、1名の方はお仕事があるので継続されていませんけれど、ほかの方は確かに継続なさっているのです。

ここに付けられていないのですが、毎回C a n d o型のチェックを全員の学習者に書いていただき、そういう方式を取ることについて、市民館の活動している方などからは当初不安の声がありましたけれども、実際にやってみると、どの学習者も全く抵抗なく、毎回、自分自身のC a n d oチェックを書いてくださって、それは全部データとして、市に集まっています。そんなような状況でした。以上、補足させていただきます。

■南委員（部会長）

ありがとうございます。ほかに皆様から何かありますか。

■加藤委員

今回ゼロビギナー向け講座で色々な所へ広報されて、結局ゼロビギナーの方は来なかったとのこと。ゼロビギナーの方がいるけど、来なかったのか、それとも、そもそもゼロビギナーはあまりいないのか、どちらなのでしょう。

■吉田委員

いらっしやいます。ですから市民館や国際交流センターには、同じ時期にゼロビギナーの方たちが申込みされて、その後、9月からスタートされているので、ゼロビギナーはいらっしやいます。

■加藤委員

今回はたまたま都合が合わないとか、何らかの理由で、来られなかったということで、分かりました。

■南委員（部会長）

ほかにいかがですか。私から質問です。先ほどの説明の中で、時間や日程を再検討する必要があるということだったのですが、どういう方向の再検討をするのですか。

■五十嵐地域日本語教育コーディネーター

今回の講座は平日の午後の開催なので、それでは来られないのかと思いました。私が個人的にほかの方に聞いたりすると、平日の午後では行かれないという人がいたので、やはり夜のクラスや土日に開催するなどの検討が必要ではないかなと思いました。

■南委員（部会長）

高津市民館で開催して、高津区の方がたくさん来たわけではないのですよね。

■五十嵐地域日本語教育コーディネーター

そうです。

■南委員（部会長）

講座を行う場所の設定はどうでしょう。

■吉留担当課長

当初の想定では、市の北部にボランティアなどの支援者が多いということ、また田園都市線沿いに企業の社員の方が多く住まわれているので、その家族滞在をターゲットに高津市民館にしたのですが、結果的に川崎区の方が多かったというのもあって、やはり南部の方でできるか検討しているところです。

■吉田委員

ただ、講師の方たちは、高津区市民館だから参加できたと思います。というのは、午前中、市民館や国際交流センターで日本語講座が終わって、お昼をかき込んで、高津市民館に来てくださって、午後からゼロビギナー講座を担当してくれました。これが川崎区だったらやりませんでしたという方が5名以上いらっしやったので。そもそも圧倒的に、外国人の方が住んでいらっしやる人数は川崎区が多いのですが、川崎区で講座を行ったら、今度は逆に講師の方がいない。講師の応募では川崎区の方が一人いたけれど、辞退されたのですか。

■吉留担当課長

そうです。川崎区の方は都合が合わずに辞退されました。

■吉田委員

川崎区の講師の方が1人のみだったのですが、この人数でしたら10人を1人で見ることができるので、そういった体制を検討することも、この先、考えられるかなというところがあったと思います。

■南委員（部会長）

ありがとうございます。では、次に、「キャリアサポートのにほんご」はいかがでしょう。

■吉田委員

全部加藤先生が講義されたのですか。

■加藤委員

1から4回の講義を行いました。

■南委員（部会長）

何かコメントをいただけますか。

■加藤委員

講座に来ていただいた方は皆さん熱心な方で、日本語のレベルはともかく、皆さん働いていらっしゃる大人ですので、しっかりした方が聞きに来てくれたと思っています。やってみての感想ですけど、キャリアサポートというタイトルと、私が講義した内容がタイトルとぴったり合っていたかと言われると、ちょっと微妙な気がしています。介護の方でJLPTが必要という方は、JLPTがキャリアに直結しますけれども、それ以外の職種でいうと、仕事と関係なく自己学習の方法を紹介したり、体験してもらったりということでしたので、タイトルよりは学習範囲が広がったかなという気はしております。

仕事の日本語という、本当にビジネス用語や、レベルが上がると敬語の使い方とか、日本語ではないビジネスマナーという話になるのですが、今回はそういうところには全く踏み込んではいないので、キャリアというタイトルと、もしかすると合わなかったかなという気はしております。

ただ、働いている方に来ていただいて、皆さん、仕事をされているので、時間は6時から8時ですけども、この時間帯になると、できる教員がとても少ないです。おそらく先ほどのゼロビギナーも、平日の午後ならできるという方がいっぱいいらっしゃると思います。では6時から8時をお願いしますと、引き受けてくださる方はかなり少なくなるだろうなという気はしております。やはり人不足という現状はあります。

■南委員（部会長）

ありがとうございます。ほかはいかがでしょう。

■吉田委員

加藤先生に伺いたいのですが、このビジネスなので、介護の方はJLPTに直結していることになっていて、それ以外の技能実習の方とか、色々いらっしゃると思うのですが、その方たちはビジネスマナーや敬語が必要な就労現場の方たちだったのでしょうか。

■加藤委員

実際の現場では、おそらく企業の方が割と懇切丁寧といいますか、親身になってやってくださっているとしますし、実際に企業の中でそれほど敬語は使わなくても皆さんやっていけるはずですよ。例えば営業職などをやろうとすると敬語も必要になりますけれども、企業の中であれば、失礼のない「です」とか「ます」を使っていれば十分です。例えば工場の中で仕事をされている方や、介護施設の中で入居者の方はいまですけど、その中で仕事をされている方にとっては、例えば敬語やマナーを外から教える必要はないのではないかなと思います。職場の中で教えていただければ十分かなと。企業によって文化もありますので、一律に外から教えるのも難しいですし、今回の学習者の方とお会いしてですが、そこまで外から教える必要性はないように感じます。

■吉田委員

ありがとうございました。自己学習が啓発になったわけですね。

■加藤委員

そうですね。いろいろ便利なツールもあるのですが、何か取っつきにくいところはあるかなとは思いますが。

■吉田委員

ありがとうございました。

■南委員（部会長）

無料であることとか、欠席率が高いことなどについて、外国の方はそういうものですよと言っただけで片づけてしまっているのか、どのように受け止めていますか。

■廣田総括コーディネーター

無料なので当日の欠席というのは、想定はしていました。初回は申込者が多過ぎて途中で申込を締め切ったので、締め切らなければ、初回は20人ぐらい参加したのかなという思いはあります。なかなか難しいですが、無料の講座でどれぐらい来れば成功なのでしょう。半分ぐらいの欠席は普通なのでしょう。

■吉田委員

ある市民館では学期の初めに、トータルの登録が約50名いて、一、二回の参加で仕事の都合や、内容が自分自身の求めるもの、JLPTやらない、やってくれないのという、そういうところが合わないということで辞める方が約10名いて、約30名が出席可能者として残っているのですが、実際当日出席する方が22名という感じですね。ほかのところを聞いていても、やはり夜間は当日に連絡なしの欠席があって、ボランティアの方が、「私の担当する学習者が来ないので、資料の整理をする」という話はよく聞きます。夜間のクラスは仕事が終わってからの勉強なので、そこまで持つかどうかというところがあります。

ただ、この講座は途中で、1回目を締め切って、同時に2回目、3回目も締め切ったのですか。

■廣田総括コーディネーター

2回目以降の申込は開放しています。

■吉田委員

開放していたけど、当日飛び込みの参加はいらっしやらなかったですか。

■廣田総括コーディネーター

1回目に1人だけいらっしやいました。

■吉田委員

あと、市民館や国際交流センターですと、当日飛び込みがそれなりにいると思います。市民館はいるのですけど、国際交流センターの夜間は飛び込みでの参加はないですか。

■安藤国際交流協会交流事業課長

学期の初めの方は多少いますけれども、それは本当に初めだけですかね。

■吉田委員

市民館は、川崎区、宮前区、中原区と多摩区などで聞いてみると、やはり当日飛び込みがいるので、それに対応する人数を割かなければいけないというのがあります。この講座も今年が初めてでしたので、やはり知られていないから当日飛び込みが少ないのかもしれませんが。市民館はもうずっと開いていて、そこに行けば日本語が習えるということが周知されているので、その辺りのところでまだこれからの部分もあるかなと思います。

■南委員（部会長）

今回、参考資料で市民館などの出席率や登録者数が記載されていて、見ていると考えさせられることがあり、それぞれの特徴でもあるのかもしれないですが、その辺りも今後いろいろなことを考えていくのに、大いに参考にしたいと思います。

■廣田総括コーディネーター

参加者数はこのようになっているのですけれども、6名の方が最後の回に出席されて、とても交流もありましたし、学習意欲ですとか、そういったことにも質的にも継続してできたというのは1つ活かすことかなとは思っております。

■河野委員

今回の事業は両方とも無料講座ですが、このような事業を有料で実施することはできるのでしょうか。人を集めるときに、無料よりも有料の方が、人が集まるというロジックもあると思います。それが海外の方にあてはまるかどうか、僕もちょっとクエスチョンだなと思ったのですが、それ自体は可能なのでしょうか。

■吉留担当課長

有料で実施する方法も可能です。

■河野委員

分かりました。あと、もう1つ気になるのは、初回の申込がすごく多く、広報をみて、行こうと思って行った方の、参加意欲が薄れていっている印象を受けたのですが、初回が多かった理由の検証はありますか。

広報をみて、近い日は予定としては空いているから行こうと。その先々になっていくと、意識が薄れていくというか。

■廣田総括コーディネーター

1回目だけを申し込んでいる方とか、1回目と4回目とか、飛び飛びの申込みも可能でしたので、そういう方が多かったと思います。

■吉田委員

連続の講座ではないですね。

■廣田総括コーディネーター

連続で申込みされた方もいたのですが、連続で申し込まれていたとしても、ところどころお休みはありました。それは会社が終わってから間に合わない方もいました。

■加藤委員

1回目参加してみて、自分のニーズに合わないなという方はいらっしゃると思います。

■吉田委員

15名いたら、それはバラバラですものね。特に就労のところでニーズというのは。

■加藤委員

そうですね。皆さんがそれぞれ御事情を抱えられていると思いますので。

■河野委員

申込みの数というのが、最初に申し込んだ時点で1回目から5回目まで、タイトルを見て、全部出たいなとか、これは出られない、出たくないを選んで申し込んでいるのですね。そうすると一番人気があったのはN4の勉強ということになるのですかね。

■廣田総括コーディネーター

そうですね。

■河野委員

設問からいうとそういうことですね。N3が次に20名だから、試験勉強に人気があり、先輩と話すのはあまり人気がないということですね。

■廣田総括コーディネーター

ただ、最後の回に出席された方たちに、どの回がよかったかというアンケートを取ると、4回目と5回目が良かったという回答が半々でしたので、先輩のお話も満足されていたのかなと思います。

■河野委員

私も最後の日にお邪魔させていただいたのですけれども、来ている方はそもそも学習意欲の高い方という

ところで、黙っていても成長していくような方達という印象は受けました。たくさん集まっていたいて、人気が高いのは試験勉強というところになるのかなというのは、ここから読み取れるのかなと思いました。

■ 廣田総括コーディネーター

会話が足りないというがあるので、会話の場を増やす何かがないかというのも、受講者の方には直接言われたことがあります。

■ 吉田委員

会話だけだったら、市民館でも十分対応できるのでは。

■ 廣田総括コーディネーター

そうですね。そういう方は市民館にも行っていて、さらにお話をしたいそうです。

■ 河野委員

もっと会話の機会が欲しいですね。

■ 廣田総括コーディネーター

そうですね。あと残念なのは1回から5回まで全回を申し込んでいるのですが、結局一度も来ないという方もいたことです。

■ 吉田委員

ゼロビギナー講座の学習者で、ゼロではなく、キャリアサポートの講座を受けるだけの日本語能力があって、紹介した方たちはずっと参加されていましたよね。

■ 廣田総括コーディネーター

ゼロビギナー講座からの学習者のうち、1人は最後まで全部出席してくれ、もう1人は2回目から最後まで出席してくれました。

■ 吉田委員

お一人は切実に仕事を探していて、元々中原市民館のクラスに参加されていて、そこからの紹介でゼロビギナー講座に来て、実は日本語ができたのですが、そこからさらに「キャリアサポートのほんご」があると紹介したら、本当に切望してそちらのクラスに行かれました。もう1人の方は暇で時間があるので、せっかくだったら行きますという、そういう感覚で、そこまで仕事をしなければならない人ではないので。

■ 廣田総括コーディネーター

中原市民館からの方は仕事を探していて、この講座後にハローワークを紹介して、その後も日本語学習を続けられていると聞いています。

■ 吉田委員

このクラスがなかったとしても、相談窓口に行って、そういうようなキャリアを進んでいったであろう、それぐらい意欲のある人はいます。JLPT、無料、有料も、そうなってくると、それはどこの団体でやるかですね。市役所でやることなのか、どうかということは考えた方がいいですね。

■ 吉留担当課長

試験対策は市役所では難しいですね。ただ、やはりニーズとしては高いというのは改めて分かりました。

■ 吉田委員

改めて、分かりましたね。

■ 南委員（部会長）

国の補助金をもらって事業を行うには、このようにしないといけないという規定があるのですよね。こういうのは駄目だと。

■ 廣田総括コーディネーター

試験対策がメインである講座はダメですね。

■ 南委員（部会長）

いろいろな気づきを得たということで、大いに生かしていければと思います。

11月15日のスキルアップ講座に関して何か御意見、御質問はありますか。よろしいですか。

来年3月15日のフォーラムについて、神吉先生はいらっしゃらないのですが、吉田委員が聞いていらっしゃることはありますか。

■吉田委員

いえ、私も打合せとか一切入っていないので。ただ、資料を見たときに川崎市に寄ったタイトルではないというのがあります。川崎市のフォーラムですよ。これは仮のタイトルでしたか。

■吉留担当課長

神吉先生の基調講演のタイトルの部分でしょうか。

■吉田委員

基調講演のタイトルです。これは本のタイトルをそのまま使ったのですか。

■廣田総括コーディネーター

副題がそうですね。本タイトルはまだ変えられると思います。

■吉田委員

川崎市の地域日本語教育フォーラムなので、川崎市に寄せたことでできればお願いしたいという気がします。

■廣田総括コーディネーター

例えばどのようなタイトルがよいですか。

■吉田委員

神吉先生がいらっしゃらないところで、それはちょっと。

■廣田総括コーディネーター

神吉先生とも御相談の上、このタイトルになっています。

■吉留担当課長

神吉先生がよくおっしゃっているように、日本語は重要なんだけど、日本語を学ぶことで、その先の多文化共生社会につなげる話をメインにお話をいただこうと考えております。

■吉田委員

川崎市の多文化共生社会推進指針を頭に持ってきて、この形の内容に落とししていくことはできないですか。

「川崎市の指針の中から読み解く多文化共生社会と日本語教育」とか、川崎市がやるということに関連づけられないですか。このタイトルだけだと、日本全国の神吉先生のファンが、神吉さんの基調講演が聴けるという感覚になるかもしれないですけど、川崎市の体制事業でやることですので。前回の部会で11月15日の研修について、神吉先生から体制整備事業の講座としてはやや外れているのではないかというご指摘があって、ただもう既に決めていることだから今年度は仕方がないけれどという話があったのですが、このフォーラムのことはまだこれから決められるのであれば、川崎市の体制整備事業としてという部分も明確に出していったほうが良いような気がします。内容はこれで変わらないにしても。ではないと浜松で聞くのか、どこで聞くのかという違いだけになってくる。

■河野委員

神吉先生の話す内容を縛ることになりますけれども。

■吉田委員

そのぐらいハードルを上げて話せる先生ですし、話したいことを話せます。

■吉留担当課長

フォーラムの前段で、私どもから川崎市の多文化共生社会推進指針の話をした上での地域日本語教育の話もさせていただきたいと思っておりますので、まずはそこで触れたいと考えております。

■吉田委員

基調講演の中身をどうするかということで、基調講演の中身を川崎市の部局がお願いする以上、川崎市の体制整備事業の中にしっかり当てはめて依頼するという形を取っていいと思います。

■ 廣田総括コーディネーター

先生、その方針を踏まえてということはお伝えしているところです。

■吉田委員

もっとハードル上げてしまってよいのではないのでしょうか。市民館で講師をされた経験もおありですから、川崎市の実情ももう少し盛り込んでとか。

■南委員（部会長）

まだ神吉先生と打ち合わせされる機会があるのですよね。この部会でそういう話が出たことをお伝えください。

■加藤委員

フォーラムの定員が70名というのは、部屋の事情でしょうか。私の感覚ではもっといっぱい入ると思いましたが。

■吉留担当課長

大きな場所が取れたので、もう少し増やせると思っています。人数を決めた時はまだ場所が確定していなかったですが、もう少し増やせそうです。100名ぐらいで考えています。

■南委員（部会長）

本庁舎2階のホールはもっと入れるということですか。

■吉留担当課長

入れると分かったので。

■吉田委員

このフォーラムはオンライン配信しないのですか。

■吉留担当課長

オンラインは考えておらず、会場で対面という形で考えています。

■吉田委員

この時間に来場することは無理だけれどという方もいらっしゃるだろうから、オンライン発信もあると、もっと大勢の方に聞いていただけるだろうなとは思ったのですけど。

■吉留担当課長

こちらも、オンライン配信があればいいかと思いますが、今回は会場ということできせいでいいと思います。オンラインについては今後考えて、集まり方や内容も含めて考えたいと思います。

■吉田委員

先着順とのことですが、広報の方法はどのような予定ですか。

■廣田総括コーディネーター

広報はゼロビギナー講座と同様に、まずは市民館の支援者の方や、小中学校の国際教室でやっていらっしゃる日本語支援員の方、あとは市内の日本語学校の先生を考えています。

■吉田委員

市役所の職員の方はどうですか。これは、体制事業の大本になる基調講演ですよね。そうすると、できるだけ多くの市役所、区役所の方にも聞いていただきたいなという気がするのですけれども。

■吉留担当課長

それも含めて、また広報先を考えたいと思います。

■吉田委員

お願いします。日本語の関係者をターゲットに広報を行うということですね。

■加藤委員

フォーラムは日本人向けというか、地域の方向けなので、自治会や町内会への連絡ルートがあるのですから、町内会長でなくていいのですが、外国人と隣り合わせで住んでいる方に来ていただければと思います。

■南委員（部会長）

普段から、意識の高い方だけではなく、こういうフォーラムをきっかけに、地域日本語教育について、もっと広い方に気づいていただく機会になりますね。あと、現場で苦勞されている方が「日本語をこういう風にやっていくことで共生できる」と分かっていたら良い機会にもなりますよね。その辺り、対象が膨らむように御検討ください。それでは、議事の（1）については、このくらいでよろしいでしょうか。

それでは、議事の（2）令和8年度地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業について、事務局から御説明をお願いいたします。

■松長根課長補佐

（資料2）令和8年度地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業について説明

■南委員（部会長）

ただいまの説明に対して、御意見、御質問等がありましたらお願いします。

■吉田委員

3年次計画から今度5年次計画になるわけですね。3年次計画のところは、最初に大きくあるように、推進指針の策定、調査を実施するところ、20ページにありますように市民意識実態調査の実施というのを企画し、それから指針が出来上がったということ、それを大きく川崎市としての体制整備事業としてやって、それが達成されたという形になって、この次の5年間のところで、体制整備事業としてやるということは、今までは日本語教育と関連して市民館の事業と国際交流センターの事業のみであったところに市直轄の事業を新たに立ち上げるという、そういう解釈でよろしいでしょうか。

■松長根課長補佐

今回、令和7年度パイロット事業としてゼロビギナー講座を行った中では、ゼロビギナーの対応が市民館などで難しいということで、まずは市で1回ゼロビギナーの方を受け入れた上で、各市民館とか国際交流センターにつなげていくというような形で今回やっています。来年度もそういう形でやっていきたいと考えていますが、市がずっと直轄でやっていくか、体制づくりはどうするかというのは、今後の話になってくるのかなと思っています。

■吉田委員

今のところで気になったのですけれど、ゼロビギナーの対応が難しいから立てたというのは、それはどこから出てきたのでしょうか。私、交流センターでも市民館でもそういう話を聞いたことがないのですけれど。

■松長根課長補佐

方針を策定するための実態調査を行った中で、ゼロの対応が難しいというのが課題としてありました。

■吉田委員

それはなぜですかということをお前の部会で問われて、それは予算が削られて足りないから、これ以上、人を増やせませんと言われましたと。ですから、予算不足で人員を増やせないから、ゼロの方たちが来たときに、新しい方を付けたいけど、それができない。

それからもう1つ、具体的に言われたことが、場所がないから。特に指定管理に変わったところで、今までの教育委員会市民館事業という形とは違って、差配できるスペースの数が減ってきたので、学習者の増減に合わせて部屋数を増減するというのが難しいと言われたそうです。この辺りというのは、調整がついていないので、場所が増やせないそうです。ゼロビギナー講座の時に、部屋をもう1つ増やすことをリクエストしましたが、できないという、お金と場所の問題というのが出てきていたと思います。

それに対する対応として、川崎市役所の多文化共生プラザに立てたらという話の流れになるのでしょうか。そうすると、多文化共生プラザは多くても10人ぐらいしか受け入れられないですよ、場所がないから。

■ 松長根課長補佐

2つコミュニケーションスペースがあるので、そこでそれぞれできるかと考えています。

大きくはないですけども、椅子と机を並べれば、10人ずつは入るとは思います。

■ 吉田委員

そもそもお金が足りません。十分ありません。ですから希望者がいても、それを受け入れることができません。それから場所がないのです。ですからゼロの方にはしっかりと音を聞いたりするだけのスペースを取りたいのですが、ありません。これに対する対応はどうなりますか。

■ 松長根課長補佐

かわさき多文化共生プラザでは、コミュニケーションスペース自体は場所が若干離れていますので、前の市民館のように近くで音が干渉するという事は、大丈夫かなとは思っています。

■ 吉田委員

でも、2グループ、3グループができるできない以前に、かわさき多文化共生プラザは川崎区役所とか川崎駅の近くになりますよね。そうすると、ゼロビギナーの方は、今回も出ていたように、自分が最初に学んだ地域に根づくという形があるから、そうするとできるだけどこか別の場所でやるとその後の地域に根づくことが少ないこともある。そのため、各市民館でゼロビギナーを受け入れるという形は、1つの理想の形ではあると思います。

ですから、そここのところを充実させて、今度識字日本語学習活動の報告でも挙がってきますけれども、市民館では、限られたスペースで、ゼロの方たちを受け入れるために、本来であれば、まだ識字学習活動を受けているはずのレベルの方たちを卒業していただいたという状況があります。

卒業していただいた方たちに、他の市民館のクラスを紹介しました。少し力がついたから、ほかにも広がりましょうと紹介したけれど、結局そこで今のところは定着ができない状態になって、戻ってきた方たちをカフェで受け入れるか、でもカフェは月に1回しかないという状況になっていると聞いています。

そうすると今度は、卒業を余儀なくされたその方たちの受入先をつくるということも必要になってきますし、そもそも川崎市の場合は国際交流センターにも、それから市民館にもゼロビギナーに向けたクラスはあるので、上の方たちといっても、なかなかB1までのクラスというのは難しいというのがあります。そここのところを受け入れるものをつくるという方法も1つあるのかなと。

それからもう1つは、各項目のところでは生活Candoを用いたプログラムの作成・実践とありますけれど、これ、既に国際交流センターは生活Candoを用いたプログラムの実践のほうに動いていらっしやうと思いますし、そもそも市民館で実施している川崎市の識字学級というのは、本来生活に密着した情報でということになっているので、生活Cando、国のものに寄せなくても、本来の形であれば、そここのところはなされているという形になっていたと思います。

そうすると、ここは何か新しい取組方法としてあるのでしょうか。日本語教育の実態調査のところを詳しくという話はあったので、それをやってみて、その結果、また何か新しくなっているところ。ゼロビギナーの講座は、25ページの実施体制の図の中にあり、その左の枠の中に識字とか、日本語講座がありますが、今回なさっていただいたキャリアアップ講座は書いてなかったと思います。このキャリアアップ講座はもうやめてしまうということになるのでしょうか。そうではなく、このキャリアアップは新しいので、これからまだ改良しながらやっていくという形で新しく日本語教育の機会の拡充を図るのですか。確かに就労者の人口は増えていますよね。伺っていたら20代、30代の若い方たちの参加が多かったですよね。

■ 加藤委員

そうですね。本当に若い方々が多かったです。

■吉田委員

そういう若い方たちがまた今度家族を呼んだ上で、ずっと川崎市にいてくれることになれば、は新しいパイとして考えられるのではないかと。その辺りの立てつけがどうなっているのかというのがすごく気になりました。

あと、それに関連して、27ページの上段のところ「日本語教育の参照枠」に基づく「生活Cando」を用いた日本語講座で講師として活動できるよう、日本語有資格者を対象に準備講座、これを今回実施してみ、市民館とかの経験者が集まれば、その方たちはそのままプログラムを実施するだけの力は持っていらっしやっていました。教室をどのような教室にするかという、市としての方針がはっきりしないと、ゼロビギナーが集まらなかったから今回はやめましょうということもできたけれども、取りあえずやってみるとか、1人で十分にこれだけの人数を教えられます、でも7人講師の方が来ているから、7人全員が活動できるように組んでくださいとか、場当たりのやってきたと思います。今回パイロットでやった結果、ゼロビギナーも集中してやれば人が集まって、しかも定着して地域に流れるだろうというのはなかったという結果が出たので、それをゼロビギナーや入門を対象として、わざわざやる必要はないという気もしますし、そうすると、この講座もこういう形の講座が必要なのかなと。

以前、国際交流センターでは、各区にとらわれない形のプログラムが回せるので、夏に日本語学校の先生にも参加していただき、それから各市民館が割とお休みになっているので、実際に支援をやっている日本語教師の方や熱心な支援者の方たちに集まっていたいて合同研修みたいなことをやって、それで川崎市の方針もしっかりとそこのところで組み入れながら、お互いにどのような活動をやっているか、実際の現場を持った方たちの情報交換する機会がありました。今教育委員会でやっている「集い」というのは市民館の方たち中心で国際交流センターまでですが、日本語学校ですとか、それ以外にも実施する団体があるかもしれない。ハローワークの方とか、そういう方たちとの意見交換をしたいという声があります。

それから、現実に出てきているのは、幸、宮前、麻生の夜間のクラスに子供が来てしまう。子供が来て、それを受け入れざるを得ない。でも教育委員会との連携が十分行かなくて、途中から教育委員会に助けていただく形でSOSを出して、情報をいただいて、それを流すというようなことがありました。連携の取り方のところでもまだまだ見えていない、あるいは、まだまだやることはたくさんあると思います。

その辺りのところも踏まえて、この後、もし5年計画を出すのであれば、もうちょっとつくり込みを考えていただきたいなと思いました。

■南委員（部会長）

ありがとうございます。今日出てきた資料の位置づけやこの先の流れなどは、これから説明があるのですか。

■松長根課長補佐

これから応募が始まるので、これはあくまで案という形です。今回の会議で御意見を伺った上で、これをつくり込んで、最終的に国に提出するという形にはなります。次の部会まで期間が空いてしまいますので、応募する前に今回の会議でいただいた意見を反映した申請書を委員の方へフィードバックできるかとは思っています。

■吉田委員

今日、休みの方も多いので、それも伺った方がいいですね。

■南委員（部会長）

伺ったほうがいいですね。前回の時に、もうこれですからという書類が後から出てきて、全然意見ができないのではないかと。踏まえて、今日このタイミングで開催されたということですので、今、吉田委員からいただいたような意見ですとか、今日御欠席の先生方にも頂戴できる意見があれば、それをいただいた上でつくり込むということによろしいですか。

■加藤委員

19ページに体制図、体制の全体像がありまして、川崎市としてやるとこういう絵なのかなとは思いますが、例えば隣の横浜市とか、神奈川県とか、そういったところとの連携や情報交換について計画されていますか。

■松長根課長補佐

神奈川県ですと川崎市と同じような体制があり、総括コーディネーターがいて、地域日本語教育コーディネーターが地区ごとに配置されていて、そのうち1人が政令市担当として、横浜、川崎、相模原を担当しています。今年度、神奈川県の方と財団の方が一緒にいらっちゃって、文部科学省補助金申請書の件で情報交換しましたが、普段から政令市担当の地域日本語教育コーディネーターと話す機会は少ないです。

■ 廣田総括コーディネーター

ただ、事業に関しては、神奈川県国際交流財団の中に配置されている地域日本語教育コーディネーターに相談するなど、交流はあります。あと横浜市では、国際交流協会の総括コーディネーターと懇意にお話しさせていただき、状況等の情報交換を行っております。

■加藤委員

分かりました。川崎市は川崎市の事情があって、地域の事情に応じてやっていかなければいけないのですが、横浜市も皆さん同じようなことで苦勞されているだろうなと思っていて、話すことで解決できるようなこともあるのかなと思いますので、体制図に書いてしまうと余計に縛られるかもしれないのですが、そういう取組は続けていただければという気がしました。

■吉田委員

日本語学校はこの体制図内にないですか。

■加藤委員

総合調整会議の枠の中に日本語学校と記載があり、右下の教育機関のところは日本語学校ですね。

■河野委員

川崎市の中でも多文化共生ではない所でも同じようなことをやっていたという話はあったと思います。川崎市として、こうやりましょうと言うと、他の所ではこういうことをやっていて、その中の多文化でやる位置づけのように、川崎市としての役割分担が見えると、一市民からすると、川崎市の中で「ここはこういうことをやっている」と見えるのかなと。先ほどの話合いの中に、N4の勉強はここではやるべきではないという話がありましたよね。そういう話も全体像として見えないと分かりにくいのかなと感じました。

■南委員（部会長）

23ページで、現状と課題がまとめられている中に、「学習者の受入れが困難な場所が出てきている」とか、「受入れ体制の構築が難しいという課題があることが分かった」と書いてあるので、その課題に対して、「こういうことをやっていきます」という答えがないといけないのかなと思います。このような計画をつくる以上は、課題ですと言ったことについては、その課題を解決するための、目に見える形で「これをやっていきます」というのが用意できたほうがいいのかと感じました。

■加藤委員

課題に対して、先ほどお金がないという切実な話があり、予算の確保というのは、川崎市がとやっていくことだと思いますが、予算の確保を頑張りますという事を書くことが必要だと思いました。日本語教育というと文科省、もともと文化庁ですけれども、経産省、総務省など色々なところもやっていると思いますので、そういう省庁と頑張って予算を取ってくださいと言ったときに、それは手間と時間のかかる話ですので、そのような予算を取るための人の確保といいますか、そういうことも、書けるかどうかは別にして考えないといけないのだろうなという気はしました。

■吉田委員

予算の確保に努めるということを書いている自治体が多いです。丹野委員がいらっしやると、どこの省庁にどのような予算があるとすぐに出てくると思います。

■加藤委員

文科省なら文科省に、総務省には総務省に、経産省には経産省に、また手間がかかるとは思います。

■吉田委員

お金の流れのことで言うと、先ほど横浜市と神奈川県との連携という話がありましたけれど、横浜市では助成金事業という形で出していて、川崎市にも関係があるのは、県立工業高校とか、それから翠嵐高校で外国の人たちが受け入れられる全日制の高校とかへの日本語学習支援を助成でやるところが手を挙げれば助成金をつけますよと横浜市で出しています。体制整備事業ですけれども、助成金を受けて、神奈川区のラウンジが手を挙げて、それで一旦通ったということで、翠嵐と工業高校のこれから外国人の生徒の受入れに向けて動き出すところをラウンジがサポートします。そこから事業区と連携を取りながら進んでいくというような、そんなプログラムをされています。

県のほうは、政令指定都市というのは、そもそも県と同じぐらい力があるのだから、それぞれやっくださいという形です。県西県東と分けたときに、圧倒的に横浜、川崎、相模原というのは規模が違うので、県の事業だと、足柄などになってくるので、そもそもの体制事業が違います。ただ、県とは情報はいつでも共有できるようにしていて、この間もゼロビギナー講座に見学にいらっしやって、「川崎市さん、これだけやっていらっしやるのですね」というようなお話をいただいています。多分国際交流協会同士は顔を合わせることはありますか、例えば横浜市さんなどと。

■南委員（部会長）

この間、イベントを一緒にやる機会がありましたので、そこで初めて挨拶をして、その後いろいろな情報交換とか、お互いの現場的に困っていることや情報をお互いにやり取りみたいなことは、機会を捉えてやらせていただいています。イベントがきっかけになって、つながれてよかったです。もう1点いいですか。この評価と検証の最後の32ページのところで、第1回総合調整会議に提示して、報告して評価を得るとするのは、これどのようにするのですか。前回もやったのですか。

■松長根課長補佐

当該年度が終わって、次年度1回目の部会ですと、国に対して3月末で報告書を出さないといけないので、1回目の部会ではなく、当該年度の3回目の部会に諮らないといけないですね。年度が替わってしまうと既に報告書を提出してしまっているんで、3回目の部会のときに今年度は日本語教室でこういう状況、人数の確定した上で、評価をしていただくには、第3回の部会がいいかもしれないですね。

■南委員（部会長）

評価というのは、どういうふうにするのですか。

■松長根課長補佐

定量であれば、3回で計画したところを3回やったと書きますし、定性の場合は回数などで図れないので、こういう状態にしたいという計画に対して、部会として、その結果の状態が正しいかどうかというのを見ていただく形かと思います。

■南委員（部会長）

市が年間の事業等について評価したものを報告して、それを部会で確認するということですか。

■松長根課長補佐

部会として評価が適正かどうかの意見を頂く形かと思います。

■南委員（部会長）

了承するかどうか。分かりました。では、今の説明の部分はよろしいでしょうか。

そうしましたら、次の議事（3）今後の審議計画・スケジュールについての説明のほうをお願いいたします。

す。

■松長根課長補佐

(資料3) 今後のスケジュールについて説明

■南委員(部会長)

今の説明に対して何か御質問、御意見がありましたらお願いいたします。

■吉田委員

今のアンケートですけれども、以前から出ているように多言語対応されるのでしょうか。

■松長根課長補佐

多文化共生プラザで相談員が6言語でおりますので、そこでできる範囲は多言対応したいと考えております。

■吉田委員

質問項目は国の調査項目とかを使えば、既に多言語されたものもたくさんありますし、これを多言語対応するかしらないかで予算規模が違ってくるかなと思いますので、その辺りのところをできれば外国の人たちにアンケートするのであれば、複数言語でやっていただきたいし、やさしい日本語版も欲しいなと思います。

■松長根課長補佐

今までの部会では、アンケート用の予算を取ってという形で考えており、アンケートを調査会社に委託するという形で考えていましたが、予算は通りませんでした。今回予定している令和8年度のアンケートは、自前という形になります。前回の実態調査のときには調査会社に委託し、郵送も全部やってくれたのですが、今度は自前なので、市から郵送するという形で対応すると考えています。

■南委員(部会長)

企業にアンケートをされるということで、外国人を雇っている企業の名簿があると思うのですが、経済労働局も企業にこの際だから聞いて欲しい項目をお持ちなのではないのでしょうか。そういう項目もせっかくなのだから、一緒に聞いてもらえると相互に役に立つかなと思いました。

■松長根課長補佐

特に企業向けに対しては、経済労働局と連携をしなくてはいけなくて、外国人を雇用している企業の一覧を市民文化局では持っていないです。特定技能の協力確認書は、1,000以上来ていますが、特定技能の外国人を雇っている会社だけとなります。その他に技人国とか、いろいろな職種がある中での一部分となりますが、そこは活用したいとは思っています。経済労働局が持っている企業とのパイプなどを含めて連携したいので、年度内に経済労働局や教育委員会を含めて話し合いながらアンケートをやりたいと思っています。

■南委員(部会長)

経済労働局でコメントありますか。

■経済労働局労働雇用部

網羅的にどの企業が外国人を雇用されているかという一覧があるか分からないんですけれども、勉強させていただきながら調整させていただきたいと思います。

■松長根課長補佐

外国人を雇用している企業がどこなのかは、令和5年度の実態調査のときにもすごく苦労したところです。

外国人雇用企業の情報をハローワークからもただけなくて、経済労働局が留学生の企業セミナーをやられているので、留学生を採用したいという企業は外国人雇用に積極的な企業ということで、そこにアンケートを送ったのですが、まだ外国人を雇っていないから答えられないという回答がありました。令和5年のときに外国人を雇用している企業100社に対してのアンケートでしたが、100社をどうやって把握するかかなり苦労した部分です。ただ、今回、特定技能の部分に関しては、協力確認書が1,000くらい

という形で、特定技能だけだったらかなり企業数はあります。全部に送付するかどうかは、またこれから検討となりますが、そこは前回とは状況が変わったのかなと思っています。

■南委員（部会長）

外国人雇用企業のリストがなければいけないで仕方がないと思うのですが、こういうことを聞いておくと施策に生かせるという日本語を絡めた項目の相談をされるといいのかなと思います。

■経済労働局労働雇用部

ぜひお願いできればと思います。

■吉田委員

どちらにしてもアンケートをするときには、実施時期をまず先に決めて、アンケートをされる側が答えやすい時期がありますので、ほかと重ならない時期や報告書などで忙しい時期とか、そういうのを外して、この時期にアンケートを送れば、回答者も回答しやすいという時期が決まると、それをお尻にして作業を決めていっていただきたいと思います。

回答をする立場の人たちから、いつもどうして同じ時期に3つも4つも似たようなアンケートが来るのですか、どれを優先させればいいのかという声は毎年のようにあります。前回の部会のときにもお話が出ていたので、そこのところはもう逆にそれを利用して、この時期だったら答えやすいでしょうという形で、こちらから投げてしまう。それぐらいの作業スケジュールを組んでいただければと思います。

■南委員（部会長）

ほかはいかがですか。よろしいですか。

そうしましたら、今日の議事で用意されていたのはこれで終わりかと思いますが、その他、何か事務局からありますか。

■松長根課長補佐

（参考資料1）外国につながる高校生・若者キャリア支援相談会
多文化コミュニティひろば12月特別企画

（参考資料2）識字学級調査票

（参考資料3）第6回外国人材活躍応援セミナーについて説明

■南委員（部会長）

ありがとうございます。

その他、何か皆様からございますか。よろしいですか。特になければ、令和7年度第2回地域日本語教育の推進に関する部会を以上で終わりたいと思います。ありがとうございました。